

# 孫犁の位置

——その解放區作家としての特異性——

渡邊晴夫

## 序言

孫犁（一九一三年—二〇〇二年）は短篇「荷花淀」、長篇『風雲初記』、中篇「鐵木前傳」と文革後に書いた『臺齋小説』、散文によって中國文學史に残る作家である。孫犁はその独自の作風を認められながら、必ずしも正當な評價を受けてきたとは言えず、時にはむしろ不當な評價を受けることさえあった。それは作家の独自の思想、作風に寛容でない、政治的な潮流が文藝界を支配していたからである。しかし、一九九〇年代以降中國における孫犁に對する評價はそれ以前よりきわだつて高くなつてきている。その評價の上昇のよつて來る所以と解放區作家としての特異性を明らかにすることが本稿の課題である。

まず中國の現當代文學史における孫犁の評價と二〇〇五年に行われた二十世紀の文學者六十人を選ぶ「世紀文學六〇家」の評選結果<sup>(1)</sup>を見ることがよつて孫犁の現時點における位置を明らかにしたい。ついでそれぞれの時期における孫犁の活動と創作及びその文藝界における位置を確かめつつ、その特異性を考えてみたい。

## 一、中國現當代文學史における孫犁の評價と「世紀文學六〇家」の評選結果

(一) 中國現當代文學史における孫犁の評價——趙樹理と對比して(1) 量的な比較

趙樹理と孫犁は解放區出身の作家の雙璧と言つてよいだろう。九〇年代以降に刊行された文學史の多くは二人にそれぞれ一章ずつを割り當てている。手元にある現代文學史(小説史も含む)十三種と當代文學史(小説史と概論を含む)十三種において趙樹理と孫犁にそれぞれさかれている頁數を對比してみると、概略次のようになる。

——現代文學史で趙樹理により多くの頁數をさいているもの——九種  
趙樹理に多くの頁數をさいているがほぼ等量に近いもの——四種

——當代文學史で趙樹理により多くの頁數をさいているもの——一種  
趙樹理に多くの頁數をさいているがほぼ等量に近いもの——二種  
孫犁により多くの頁數をさいているもの——五種

孫犁に多くの頁數をさいているがほぼ等量に近いもの——四種

等量の頁數をさいているもの——一種（別掲資料）

以上から孫犁は現代文學史においても趙樹理と同等かそれに近い評價を受けるようになってきており、當代文學史では明らかに趙樹理より評價されていることがわかる。しかし九〇年代以前においてはそうではなかった。

一九五三年發行の王瑤『中國新文學史稿』下では、趙樹理にさかれている頁數が四に對して孫犁にさかれている頁數は一に過ぎなかった。しかも趙樹理に對してはその主要作品をとり上げてすぐれたところが詳細に分析され、評價されていたのに、孫犁については以下のようにその特質を指摘するとともにその抒情性をマイナスと見る評價もつけ加えられていたのである。

彼のこれらの作品では、農村の女性の活動に關する描寫がしばしば重要な位置を占めており、その中には勇敢で力強く逞しい革命的な行動もあれば、やわらかで細やかな男女の愛もある。時にはこうした緻密な描寫があまりに生きいきとしているため、作品全體のあの戦いの雰囲気とそぐわないところが生じて、そのため作品が達成しなくてはならない成果を多少とも損なっている。

一九七九年發行の北京大學等編『中國現代文學史』の第十四章趙樹理等的解放區小説の構成は、第一節趙樹理、第二節丁玲的《太陽照在桑乾河上》、第三節周立波的《暴風驟雨》、第四節其它的長篇小説、第五節其它的短篇小説となっており、趙樹理については章の標題に名前が掲げられているだけでなく、第一節全體が當てられ、全體として七・五頁がさかれているのに對して、孫犁には第五節の中で二頁がさかれ

ているに過ぎない。

一九八八年に刊行された顏雄等主編『簡明中國現代文學史』の第九章解放區の小説の構成は、第一節趙樹理、第二節丁玲的《太陽照在桑乾河上》、第三節周立波的《暴風驟雨》、第四節孫犁等的小説となっていて、節の標題に孫犁の名前が入り、孫犁には三頁、趙樹理には五頁餘がさかれている。相對的に孫犁の比重が高くなってきていることがわかる。

### (2) 質的な評價の比較

九〇年代以降の現當代文學史における作家、作品の評價という點でも、趙樹理の作品についてはその大衆性、民俗性、技巧に正當な評價をおくる一方で、次のように問題點を指摘する記述も見られる。

のがれることのできない時代のおよび歴史的原因によって、趙樹理の創作にももちろんある種の限界が存在している。彼は「問題小説」を提唱し、直接當面の政治的任務に奉仕することを強調した。古典文學と民間文藝の傳統に目を向けたが、外來の文藝を手本とすることはおろそかにした。そのため藝術的視野は十分に廣がらず、かなり閉鎖的になった。

これに對して孫犁についての記述にはマイナスの評價はまったく見られない。つまり質的な面でも孫犁と趙樹理に對する評價はかつてとは逆になっているのである。

九〇年代以降の孫犁に對する評價の上昇は、文革後における西洋の各種の文藝思潮の受容を通じて變化した文學觀と文學研究、文藝評價の基準の變化を反映したものであることは言うまでもない。現代文學史十三種、當代文學史十三種における孫犁評價の違いはそれぞれの編著者の著述時點での認識の違いを示したもので、それぞれの評價が研

究者共通の認識をもとに記述されているわけではない。従って現在における孫犁評價も過渡的なものと考えている。

## (一) 「世紀文學六〇家」に見る孫犁の位置

二〇〇五年に實施された「世紀文學六〇家」を選ぶ評選は、まず楊義、陳思和、王曉明、王富仁、於可訓、謝冕、白燁等現當代文學の専門家二十五名が一〇〇名の候補を選び、書面による投票で六〇名に仕上げた上で、二ヶ月間にわたってインターネットによる讀者の投票にかけられて決定したものである。それによれば一位から十位までは、1 魯迅、2 張愛玲、3 沈從文、4 老舍、4 茅盾、6 賈平凹、7 巴金、7 曹禺、9 錢鐘書、10 餘華となっている。以下二十二位に孫犁、三十一位に趙樹理が入っている。いわゆる解放區作家で孫犁より上位にいる者はいない。二十五人の専門家の評點を見ると一〇〇點は魯迅、張愛玲、沈從文、茅盾、曹禺、汪曾祺の六名、その次の九十四點は老舍、賈平凹、巴金、莫言、王安憶、周作人、戴望舒、孫犁、艾青の九名である。専門家の評點では孫犁は老舍等八名とともに第七位である。これが専門の研究者から見た現在の時點での孫犁の二十世紀文學における位置と考えてよい。

## 二、各時期における孫犁の活動と文藝界における位置

孫犁は一九三〇年育徳中學在學中に二篇の短い小説の習作を書いているが、本格的に書き出したのは抗日戰爭中の解放區においてであった。二〇〇二年に亡くなるまでの孫犁の創作活動を、一、抗日戰爭期、二、國內解放戰爭期、三、建國後、四、文革後の四つの時期に分けて考察を進め、孫犁の文藝界における位置を確かめたい。

### 孫犁の位置

## (一) 抗日戰爭の時代

「抗日戰爭がなかったら孫犁は作家になつていなかったらう」という中國の研究者の指摘があるが、まさにそうであつたと思う。一九三三年に育徳中學を卒業した孫犁は一九三四年北京に出て、市や小學校の職員をしながら『大公報』などに作品を投稿する文學青年の生活を二年ほど送つたが、成功せず、一九三六年には郷里から遠くない同口鎮の同小學校の教員となり、國語と理科を擔當、夜は宿舍で魯迅を讀む日々を送つていた。作家として立つことは當面の課題とはなつていなかった。抗日戰爭はそういう孫犁にペンをもって立つ機會を與えた。一九三七年七月夏休みで家に歸つていた時、抗日戰爭が勃發した。派遣されて冀中に入った呂正操將軍が結成した抗日自衛軍司令部に加わつていた小學校の同僚のすすめで、孫犁は抗日の宣傳の仕事に参加した。

孫犁のこの時代の活動は評論・文藝理論の執筆、雑誌・新聞等の編集、創作、教育に分けられる。一九三七年から三八年にかけて「現實主義文學論」、「魯迅論」、「戰鬥文藝的形式論」などの評論を書くことから孫犁の仕事は始まつた。これらを見ると孫犁はマルクス主義の典型論、リアリズム論、文藝のジャンル論等に關する基本的な文學の素養を身につけていたことがわかる。魯迅については一九四一年に「魯迅、魯迅的故事」と「少年魯迅讀本」を書いている。後者は子ども向けに書かれたものだが、この時代に魯迅の生涯と作品から何を學ぶかを明らかにし、著者の對象への熟知と傾倒を示した。同じ四一年『冀中一日』を編集する過程で得た體驗をもとに投稿者の文章へのアドバイスを内容とする『區村、連隊的文學寫作讀本』が書かれた。この著作はのち『文藝學習』と改題、版を重ねた文藝理論書で、理論家とし

ての孫犁の力量を示したものである。一九三九年晉察冀通信社に移って以後孫犁は『文藝通訊』、『山』などの雑誌、『晉察冀日報』副刊『鼓』の編集にたずさわる。記者、編集者は孫犁の生涯の仕事となる。創作では四二年に書かれた初期の代表作「走出以後」と一九四五年五月延安で書いた名作「荷花淀」が注目される。前者は不正常的な結婚を自ら解消し、學んで看護員の仕事につく若い娘の短い間の成長と變化を抗日根據地の農村の變化を背景に描いた作品である。封建的な婚姻で縛られた女性が解放され、自立する條件が解放區にはあることを孫犁は明らかにしたのである。自立した女性の明るさが印象的である。後者は河北の白洋淀を舞臺に夫を遊撃隊に送り出した農村の若い妻たちが湖上で日本軍との戦闘に巻き込まれるが、夫たちの遊撃隊に救われて九死に一生を得、やがて自分たちも抗日の戦闘に立ちあがるのを描いている。郷土の自然とそでの人びとの日常の營みを守ることに抗日の戦いが分かちがたく結びついていることが讀者の胸に響いてくる。月の光を浴びて庭で葦の莖でござを編む若い妻、湖の葦と蓮の花の香を運んでくる風、廣々とした湖の上をゆく舟、日本軍の大船に追われて若い妻たちが小舟をこいで逃げ込む蓮の葉と花の茂みなどが簡潔で平明な言葉で美しく描き出されている。孫犁は白洋淀の農民の生活の日常に美を見いだし、それを描くことによって、生活を守ることの正當性と日本の侵略の不當を明らかにしたのである。日本軍の船を撃沈する場面でも戦闘の流血は描かない。自らの側の美を描くことが彼のなすべきことであり、敵の醜さを描く必要はなかったのである。この作品は孫犁の美意識と思想を體現した作品で、延安『解放日報』に發表されて一躍その文名を高めた。一九三八年冀中抗戰學院が設立されると、孫犁は「抗戰文藝」と「中國近代革命史」を教え、一九四

二年、華北聯合大學教育學院の高中班で國文を擔當した。一九四四年春、華北聯合大學の學生を引率して山西を經、延安に行き、魯迅文學藝術院で學生として學ぶとともに、『紅樓夢』の講義も擔當した。

以上に見るように北京のような大都市での文學青年としての投稿生活で成功をおさめることはできなかったが、文化的に立ちおくれた農村部では孫犁の見識、文筆の能力は貴重であったと言えるだろう。この時代をふり返って孫犁は次のように述べている。

いま思いかえしてみると、當時の創作はほんとうに存分に意をつくし、思いどおりに描くことができた。干渉もなければ、制約もなく、ましてや私心や不純な考えなどなしに、ひじょうに楽しく仕事にとり組んだものだった。

中學時代の同窓で共產黨員であった二人の友人が「托派」(トロツキスト)として消されるといふショックな體驗もしたが、一九四二年に自身も共產黨員となった孫犁はこの引用に見るように、抗日戦争の時代を自由にのびのびと力を發揮することができた、よき時代であったと考えている。統一戦線のもとで戦われた抗日戦争の時期は地主、資本家も統一戦線の構成員であり、「減租減息」が農村における闘いの基本であったことが示すように階級対立を激化させない方針がとられていた。この時代の主流をなす思潮と孫犁自身の思想とは基本的に一致し、矛盾はなかったと見てよい。孫犁が延安に行った一九四四年には整風運動はすでに終わっており、日本軍と遊撃戦を戦う冀中、晉察冀から来た孫犁は革命作家として受け入れられたことも幸いしたと、指摘されている。

この時代の孫犁は五四の新文學とロシア、ソ連及び歐米の文學から得た文學觀をもち、魯迅に傾倒する「文學青年」から抗日戦争を戦う

「文藝工作者」を経て、解放區で育った「新進の革命作家」という道歩んだ。

## (二) 國內解放戰爭の時代

一九四五年八月十四日延安で抗日戰爭勝利を迎えた孫犁は、秋に華北聯合大學の學生を引率して晉察冀に向けて出發し、冬になって張家口に到着、同行の人たちと別れて郷里の冀中に向い、六年ぶりに安平縣東遼城村の家に歸った。延安で名聲を得た孫犁が晉察冀に歸った時、「荷花淀」、「蘆花蕩」などの作品が張家口の放送局から放送され、『晉察冀日報』は按語をつけてそれらの作品を掲載した。著名作家となったが、この時代の三年餘りを孫犁は郷里の冀中の蠡縣、柳村、河間、白洋淀、博野、饒陽の張崗村、深縣などの各地に下放し、作家として、中堅幹部として土地改革と宣傳の仕事にとりくんだ。「文藝講話」にいう長期開農民の中に入ることを實踐しつづけたのである。作品としては一九四六年に「碑」、「鐘」、「琴和簫」、一九四七年に「新安游紀」、「二別十年同口鎮」、四八年に「光榮」、四九年に「蒿兒梁」、中篇「村歌」を書いた。これらの作品はリアリズムを基本とし、現實の矛盾から眼をそらさないものだったが、「小資情緒」(小ブルジョア的な感情)という批判を受け、また自身の家庭の階級成分を「富農」と斷定されるという經驗をしている。編集者としては一九四六年に『平原雜誌』を編集、魯迅にならって「編集後記」に力を注いだ。一九四九年一月解放された天津に入城、創立された『天津日報』副刊科の副科長(科長は方紀)として編集に携わった。この時期に孫犁が受けた批判とそれを孫犁をどう受けとめたかを見ておくことにする。

### (一) 『晉察冀日報』副刊の「碑」批判

「碑」は滹沱河のはとりの趙庄村の趙老金の家に夜中に來て休む間

#### 孫犁の位置

もなく移動した八路軍の小部隊が敵に遭遇し、二人の兵士が救われた以外、隊長以下十數名の兵士が河を渡りきれずに犠牲となるのを描いた短篇である。この作品は多くの孫犁の小説がそうであるように事實を淡々と記述する散文のような感じで書かれている。話は四つの部分から成っていて、起、承、轉、結という構成をもっている。まず「起」の部分で趙庄村の六十を過ぎた趙老金とその妻、年とってから生まれ十六、七歳の娘小菊が紹介される。それぞれの人物が具體的に描かれる。たとえば老金の妻の思いやりのある性格は「どこかの若い人が遠出をすることになると、彼女は鶏が時を告げる前に目を覺まして、その人のために頭の中で持ち物を一つひとつ點檢し、道のりを計算して、母親と妻の氣持ちを思いやっってひそかに涙を流すのである。」というように書かれている。母と娘が夜なべ仕事で糸を紡ぎ、機を織りながら、八路軍の兵士の噂をしているところへ、李中隊長が訪ねてくる。李中隊長と兵士たちが緊急の任務で滹沱河を渡ってゆくところからが、「承」にあたる。趙老金が舟で送っていったあと天候が變わり、河に氷がはり始める。夜明け前に妻が外へ出てみると、霜と雪が降り積もっていた。家に入ろうとした時、機關銃を連射する音が聞こえた。ここからが「轉」である。銃聲が近づき、村人たちは戦いを見ながら撤退してくる兵士たちが敵弾に倒れてゆくのを見た人びとは「俯いて、絶望の悲しみを感じた。」と書かれている。この部分をとらえて『晉察冀日報』の評論は「小資情緒」と批判したのである。これに對して村人は「兵士たちが逃げ場を失っているのに、助けることもできないから、俯いて、悲しくなったのであって、それは小資情緒などではない。」と孫犁は反論している。戦いながら撤退する兵士たち

は水の張りはじめた冷たい河に次つぎに沈んでゆき、こちらの岸にたどりついて助かったのは二十人のうち二人だけであった。これから後が「結」になる。そのあと何日も河邊で兵士の遺體を引上げるために網を打ちつづける趙老金とその心情を描いて作品は終わる。「岸邊に立つ老人は、平原の一つの記念碑である。」という結びの文は、倒れた兵士たちに對する農民の深い思いと作者の共感を象徴するものである。この作品が描いたのは子弟兵と呼ばれた兵士と民衆との深い結びつきとその大事な兵士たちが目の前で倒れてゆくのをどうすることもできない人びとの悲しみである。日常の生活と戦闘がとなり合せの遊撃區における生活の苛酷さとそれに屈することなく生きる人びとの姿と心を作者は書いたのである。「俯いて、絶望の悲しみを感じた。」という描寫をどうして「小資情緒」というのであろうか。「絶望の悲しみ」という表現は過度に感傷的であり、そういう感情は労働者、農民のものではなく、小ブルジョアに特有のものであるとする考え方である。孫犁は當時康濯に書いた手紙で「この批評は實際をもとに眞理を探求するものにはなっていないと思う。」とした上で、しかし「反論など書くつもりはない。」と書いている。孫犁は手紙に見るかぎりこの批判に打撃を受けたようには見えないが、理不盡な批判であっても「小資情緒」という批判に反論が許されなかった時代の思想狀況を感じることが出来る。

## (2) 土地改革の會議で「富農」と断定

一九四七年土地改革に参加している作家の會議で孫犁の家庭の階級成分が「富農」と断定されたのは、孫犁の父が商店で働きながら金を貯めて土地を少しづつ買って所有していたためであった。孫犁は次のように回想している。

冬、土地改革の會議の雰囲気は、極度に左傾していた。王林組長はまず孔厥のことを話し合う豫定にしていた。私は政治的經驗がなかったのと、今度の會議の重要性を知らなかったため、さらに自分の家庭の階級区分が何に屬するのかわかりたいと思っていたこともあって、まず自分のことを討議してくれるように要求し、たちまち重圍に陥ったのだ。いくつかの意見は受けいれがたく、感情に走った言葉をだいぶ吐いてしまった。會議はにらみ合いのまま譲らない状態になり、ついに「農民の上にあぐらをかいた幹部として排除」され、別室で待機させられた。即ち、隔離である。<sup>(1)</sup>

孫犁は「富農」と断定されることをまったく豫想していなかったことがわかる。「感情に走った言葉を吐いて」「農民の上にあぐらをかいた幹部として排除」されたことが、かなりの打撃となったであろうことはこの文章からも読みとれる。

(3)『冀中導報』による「一別十年同口鎮」と「新安游紀」の批判

「一別十年同口鎮」は他郷で活動している友人の留守家族がタバコを作って生活改善にとり組んでいる様子を描き、これを知れば友人もきっと安心するだろう、と結んだ散文である。富農である一家の生活を好意的に描いていることが批判されたのだが、富農が生活改善の工夫をすることは、當時の政策で許されていたことで、本来批判されるべきことではなかった。「新安游紀」は新安市の傳説となっている抗日の英雄の神出鬼没の活躍を描いた散文である。この作品に對する批判は新安市の東西に通っている大通りを南北にとり違えて書いたことをとらえて「客里空」(カルニークフ主義)根も葉もないでっち上げ報道)と断じたのである。ある傳記が指摘するように、その批判は「文章の誤りにあったのではなく、社會的なものにあった。」<sup>(2)</sup>と考えた

方がよいだろう。批判の原因の一つは家庭の階級成分にあり、もう一つは孫犁が著名になっていたことにあった。著名になったことを孫犁が喜んでいなかったのは、當時の康濯宛ての手紙に記されている。<sup>(6)</sup>

孫犁は新進の作家、一人の幹部として使命感をもって課せられた仕事にとり組みつつ、内戦の時代を生き、作品を残した。彼自身の姿勢は基本的に抗日戦争の時代と變わらなかつたが、鬭争によって地主から土地をとり上げる土地改革は必然的に階級對立を激化させ、思想的に敵味方を峻別する考え方が時代の主流となつた。時に政策の適用に違和感をもつこともあつたが、孫犁は黨から與えられた任務を忠實に果たした。しかし、その作品と思想に對して必ずしも正當とは言えない批判が加えられたことが、この時代の特徴であつたが、批判を受けとめる孫犁の姿勢によってまだ大きな矛盾とはなつていなかった。孫犁は著名作家の一人としてその思想を時代の主流から批判される位置にいたのである。

## (二) 建國後

それまでの創作と活動によって孫犁は中國作家協會理事、作家協會天津分會副主席に選ばれた。『天津日報』副刊の編集者として劉紹棠、從維熙、房樹民、韓映山などの新進を見出して、その作品を積極的に掲載する一方、萬國儒などの勞働者を作家に育てた。同時に彼自身も多くの短篇、評論、散文に長篇『風雲初記』、中篇『鐵木前傳』などの名作を書いて、独自の風格を評價されるようになる。しかし、その作品と作者自身も理不盡な批判を受けた。建國後の政治のあり方に由來する人間關係にも孫犁は苦しむようになる。一九五六年名作「鐵木前傳」を完成後、孫犁は重い精神の病氣にかかる。原因は政治にあつた。發病して以後の十年ほとんど作品を書くことなく、文革を迎えて

## 孫犁の位置

いる。この時期の孫犁を(1)孫犁が受けた批判、(2)建國後の人間關係、(3)發病とその原因、(4)病氣からの回復と一九六二年、(5)文革の到來、の五點から見ておきたい。

### (1) 『光明日報』の孫犁批判

一九五一年十月六日『光明日報』は一面を使って孫犁の創作と作品『村歌』を批判する二篇の文章を掲載した。一篇は「鐘」「囑咐」「小勝兒」「村歌」を擧げて、孫犁は「小資産階級の觀點、趣味にもとづいて生活を見、描いている」と嚴しい語調で批判し、もう一篇は「村歌」について主人公の雙眉という女性は貧農の娘という設定になつているが、この娘の思想、感情は農民階級特有のものではなく、「小ブルジョア階級の思想、感情であり、作者自身の思想、感情である」と批判し、そんなつた原因は「文藝講話」の規定に従わなかつたことにあると斷定した。この批判が作者の創作活動全體と作品の内容に即したものではなく、異端と判斷した作品と作家に向けられた政治的なものであつたことは明らかである。それ故に孫犁と「村歌」が一九五九年に方紀によって作品の詳しい分析にもとづく高い評價を受けるようになったのは當然のことであつた。この批判によって孫犁がどういふ打撃をこうむつたかは明らかでないが、その後もあいついだ政治運動とそのもとでの人間關係に違和感をもつようになっていったことは確かである。

### (2) 建國後の人間關係

建國後のあいつぐ政治運動は人と人との間の信賴關係を搖るがすものであつた。それは抗日戦争の時代はもちろん、内戦の時代にもなかつた人間關係である。孫犁は「建國後、人と人の關係に、地位によって、あるいは他のことによつて、困難な狀況においては思つてもみなかつた

たような變化が生じた。私はこの變化にひどく苦しんだ。」と述べている。その苦しみは親しい友人、知人との間でも悩みを語り合えない状況によるものであった。一九六〇年代の初め舊知の評論家侯金鏡と頤和園内の保養所で過ごした時の回想に孫犁が「その頃はたとえ友人や親しい人の前であっても、だれも個人の私ごとを話すのに慣れていなかった。」と述べているのは、それを示すものである。

### (3) 發病とその原因

一九五六年「鐵木前傳」を完成後、孫犁が罹った重い精神の病氣の原因は、胡風事件に連座した友人を公開の席上で辨護して、後にそれが毛澤東自身が斷罪した事件であったことを知って、ショックを受けたことにある。孫犁は次のように書いている。

その後私は、この事件が封建社會の「欽定」の重大犯罪事件と似通っているのを知った。もし會議を主催していた人がよく知っている人でなかったら、私は會議でああいう時宜にかなわなかったことを言ったのだから、まきぞえになつていたかもしれない。私は大きなショックを受け、ほどなくして神經衰弱症になつた。

永年の心身の疲勞、蓄積したストレスも發病の遠因となつたと考えられる。抗日戰爭中に二人の友人がトロツキストとして消されたこと、土地改革の時に「富農」と斷定されたこと、作品に對する理不盡な批判、建國後の人間關係など政治に起因するストレスを孫犁は永年にわたつて受けていた。先の言葉からも發病の原因が政治にあったことは明らかである。郭志剛などによる諸種の傳記で孫犁の發病の原因が政治にあったことを指摘したものは管見の限りではない。治療と轉地療養をくり返したが、病氣はよくならず、孫犁は一九五七年から一九六一年までの五年間全く作品を發表しなかつた。病氣の原因が政治にあ

り、その下での人間關係にあつたとすれば、それが改善されないかぎり病氣から回復するのは難しかった。發病後、反右派鬭争が起り、彼が育てた劉紹棠、從維熙、友人の丁玲等は右派と斷定され、勞働改造に送られた。大躍進の失敗、反右傾鬭争と政治運動はつづいていた。

### (4) 病氣からの回復と一九六二年という年

孫犁は「一九五六年大病のあとは、ほとんど書かなかつた。一九六六年以後の十年を加えると、私の創作上の空白は、二十年の久しきに及ぶ。」と後に述べている。しかし、孫犁の病氣は六〇年代のはじめにはかなり回復していたことを示す事實がある。

孫犁の年譜を仔細に調べてみると、一九六二年には「病期瑣事」という副題をもつ「黃鸝」「石子」という二篇のかなり完成度の高い散文を含む十七篇の作品を書いていることがわかる。また、この年に孫犁は長篇『風雲初記』三集を書きついで完成させている。ところが六三年には序言、後記、書信など六篇、六四年には講演原稿など三篇、六五年には短い散文一篇と作品は減り、文革の始まつた六六年には一篇も發表していない。なぜ六二年に孫犁が十七篇の作品を書きえたのかは、この年が大躍進の破綻から回復するための調整政策が軌道に乗り、文藝の面でも建國後もつとも自由が保障された時期にあつたことに求めることができる。孫犁は書くことができるようになった時代の状況を感じとつていた。これは以前小論で指摘したが、中國では孫犁のこういう状況に着目している研究は當時はなかつたと考えられる。書き加えられた『風雲初記』の末尾に地主の家庭出身で縣長を務めた知識分子李佩鐘が黨の文獻を守つて犠牲になつた状況を傳えたあと、次のように書いたことも、孫犁の當時の認識を明らかにしている。

今思い返せば、あのような厳しい時代、殘酷な状況において、彼



女の性格に多少の缺點があり、心のうちに痛み——他の人には容易に理解できない痛みを抱いていたにもかかわらず、彼女は決然として二つの封建的な家庭からぬけ出て、何度も舅や實の父と眞つ向から對決する鬪争をおこなった。これもまた得がたいことであつた。私たちは完全無缺を求めるべきではない。彼女は神聖な抗日戰爭に参加し、戰爭の中でその生命を犠牲にした。彼女は中華民族のすぐれた息子、娘の隊列に屬しており、抗日戰爭における無数の烈士の中の一人であつた。

ある研究者が指摘するように、「知識人原罪説」がイデオロギーとしてすでに形成されていた當時にあつて孫犁が李佩鐘に對する特別な氣持ちをこのように表明し得たのは、やはり一九六二年という年の特殊性によるものであつた。

五七年から六六年までの十年孫犁は「大病のあと、ほとんど書かなかつた。」と書いているが、病氣で書けなかつた時期と書かないことを選択した時期があつたのである。孫犁をして作品を書けなくさせたのは敵味方を厳しく分ける極左的な政治であり、それは文革という極點に行きついたのである。

#### (5) 文革の到來

文革の到來によつて天津でもっとも有名な作家であつた孫犁が直面した糾弾は人間の尊嚴を打ち砕くものであつた。兩側から紅衛兵に腕をとられて、行列の先頭で、糾弾會場につれこまれ、「そのあとはありとあらゆる侮辱を受けた。私はこの上ない恥辱と考へた。その日の夜、感電自殺をしたが、失敗した。」と孫犁は記している。はじめは職場で、のち幹部學校での肉體勞動の日々孫犁は自殺を考へない日はなかつたという。一九七三年幹部學校から釋放される少し前に妻は糖

尿病の治療が受けられずに亡くなつた。釋放されて家に歸つてからの慰めは没收された後返還された藏書にカヴァーをかけることだつた。孫犁はそのカヴァーに書籍の版本、購入のいきさつなどのほかに、時にその時々感慨を文言で記すことがあつた。それは讀まれば身の危険を招く内容のものであつた。周恩來が亡くなり、鄧小平が再び失脚した一九七六年は孫犁にとつて先の見通しのきかないもっとも暗黒な時期だつた。孫犁は絶望の中で無氣力、無關心に陥つていた狀況を後に「一九七六年」という作品に記している。

建國後の十七年は主流の思潮（階級對立を極度に強調する政治）と孫犁の思想との間に重大な矛盾が生じ、その抑壓によつて孫犁は精神の病にかかり、それ以後自ら書かない選擇をせざるを得なくなつた。その後の文革の十年を含めて、もっとも成果の期待される年齢の二十年をほとんど書くことなく過ごした。孫犁はあえて書かない選擇をし、自ら當時の文壇から離れた位置に身をおいたのである。

#### (四) 文革後

一九七六年毛澤東の死去と四人組の逮捕によつて文革が終つると、孫犁は文革の犠牲になつた遠千里、趙樹理などの友人、知人の回想からはじめて、散文、評論、薈齊小説と題する短い小説、古典論、讀書記などを堰を切つたように發表しはじめる。自らが書く動機を孫犁はこう語っている。

しかし、ついに國が混亂を鎮めて正常にもどし、「四人組」が萬民に裁かれるのを見ることができた。苦しみ過ぎた後苦しみを思うには、とりもなおさず亡くなつた人を悼むことである。ついに彼等が正義も道理もない暗黒の社會に命を落とし、政治清明の幸福とともに享受することができないのを残念に思う。これが老

い衰えた年になつても藁齋小説を書く所以である。<sup>(1)</sup>

孫犁は文革の批判から始めて建國期、抗日戰爭期にまでさかのぼつて自分の體驗した政治の問題點をふり返り、批判を深めていった。散文を主體とし、回想記、文藝評論、古典論、讀書記、小説と廣いジャンルにその作品は及んでゐる。その創作の量は二十年の空白の前に書いたものに匹敵する。孫犁の文革後の仕事の特色は注目すべきものがある。空白前の孫犁は美しいものしか書かないことを信條としたが、文革後の孫犁は醜いものを書くことを避けなくなった。また、その文章は平明で美しい口語體に文言的要素を交えるようになり、時には文だけで作品の一節を書くようにもなった。文言をとり入れることで孫犁の文章はいつそう自由になつたと言へる。それは「藁齋小説」の諸篇の文體を見れば明らかである。孫犁は九五年に筆を置くまで、精力的に書きつづけた。

しかし、改革開放の進行とともに生じた金錢萬能の狀況は孫犁を失望させ、さらに彼を絶望に追いこんでいったように思われる。次の文章は孫犁が晩年に自らの生涯をどう考えていたかを示すものである。

彼は亡くなつた。きつく寄せられた眉、額の皺は、死によつても伸びることはなかつた。彼は老戦士であつたから、國を憂へ民を憂へたため死んでも目を閉じなかつたと言つても、もちろん道理がないわけではない。しかし、近年彼を最も苦しめ、不安にしていたのは、たえず心に浮かぶ過ちを悔いる氣持ちであつた。革命に對する、仕事に對する悔いではない。この面については彼は完全に心に問うて恥じることはないと言へた。彼は自分が壯年時代に遠くに行き、故郷を離れ、老いたる父母、若い妻、幼い息子、娘を捨てて顧みなかつたことに對して、彼らに對して果たすべき

責任を果たさなかつたことで、過ちを悔い、苦しんでゐるのだ。<sup>(2)</sup>

これはどういうことであろうか。革命のために家族を顧みることなく奔走した人が死を前にして家族に果たすべき責任を果たさなかつたことを悔い、苦しむのは、かつて献身した革命の事業が今の彼には價値あるものと評價できないからではないか。文革の絶望から一度は回復し、改革開放の政治に期待を抱いた孫犁であつたが、今や一路資本主義の道を進むかに見える中國の現實に革命の理想の崩壊を見、家族を犠牲にして献身した革命の大義に疑問を抱かざるを得なくなつたのであろうか。それとも文革で打ち壊された革命の理想は回復できなかったのであろうか。孫犁の晩年に希望はなかつたかに見える。巴金が常に未來への希望を表明しつづけたのとは對照的であつた。二〇〇二年七月、孫犁が亡くなつた時、新聞は「文學大師」孫犁逝去と報じた。

### 三、解放區作家としての特異性

文學史で解放區の文學に分類される作家は、趙樹理、孫犁、劉白羽、康濯、馬烽、孔厥などで、それに丁玲、周立波が加わる。こういう人たちの中で孫犁の特異性を性格、文學觀・思想、作風、描く對象、魯迅への親近の五點から見てみたい。

(一) 性格——名利を望まず、孤獨を好む

孫犁は自分の性格について「私は幼いころから内氣で、偉い役人に會うのが怖かつた。革命に参加してからは偉い人を見かけると、いつも避けた。もし會合の場であれば、遠く離れていて、會が終わると急いでその場を離れた。」と書き、また、「私は知名人にも會いたくない。トップの人が文藝界の知名人を食事に招待し、私にも來るようにいつたが、私はすべて行かなかつた。」とも述べてゐる。

建國後、先に見たように「人間關係」に悩みをもつようになり、それとともに狷介さを強めていたことは、次の引用からもわかる。自分で自覺しているが、社交、名利よりも自分の氣持ちを優先するのである。

またある時、市の文教書記がある畫家を宴席に招待することになり、車を出して書畫の販賣を好む友人に私を迎えに來させたが、冗談を言つて私を不愉快にしたので、斷固として斷つた。<sup>35</sup>

文革後、孫犁は作家協會の會合にもほとんど顔を出さないと劉心武は私に語り、その位置を「他在邊緣。」という言葉で表現した。<sup>36</sup>

## (二) 思想・文學觀——人道主義

孫犁は一九四二年に中國共產黨に入黨する以前にすでにマルクス主義の文藝理論を身につけていたことはその年に書かれた『區村、連隊的文學寫作讀本』(『文藝學習』)に明らかであるが、その思想の基底には五四文學の人道主義があつた。次の文章はそれを示すものである。すべて偉大な作家はみな偉大な人道主義者である。例外はない。彼らは人情に富み、理想に富んでいる。彼らの作品は彼らの現實生活に對するこういう態度を反映している。人道主義を文學からぬきとつたら、文學は何ものでもなくなる。<sup>37</sup>

人道主義は建國後の中國でしばしば批判の對象となつた思想である。人間中心の思想、人道主義にもとづく孫犁の作品に現れた人間觀が「小資情緒」という批判を招いたのである。

(三) 作風——生活の中の美を描く。ストーリーに重點を置かず、ある時代の社會に生きる人びととその生活を描く

一九五六年大病の前までの孫犁は美しいものしか書かなかつた。日本の侵略と戦う郷里の人びとが示す美を孫犁は書こうとしたのである。

## 孫犁の位置

日本軍との戦闘を書く場合も、戦闘を暗示するにとどめる象徴的な描き方をしている。孫犁自身はこう語っている。

善良なもの、美しいものはある種の極致に達することがある。ある時代、ある状況で頂點に達することがある。私は美の極致を経験した。それが抗日戦争であつた。私は農民を見た。彼らの愛國の情熱、戦いに加わる勇敢さは私を深く感動させた。私の文學の創作はその時から始まつた。私の作品はこの善良なもの、美しいものを表現した。<sup>38</sup>

孫犁の小説に波瀾萬丈のストーリーはない。讀者を惹きつけるのは平明でむだのない文章で描きだされる自然と生活の情景の美、その中に生きる人々の行動の美しさである。

## (四) 女性と女性の美しさを好んで描く

孫犁は好んで女性を描き、初期の「走出以後」の王振中、出世作「荷花淀」の水生嫂、中篇「村歌」の雙眉、「鐵木前傳」の九兒、小満兒、長篇『風雲初記』の春兒、李佩鐘など時代の特色を具えた、美しく、印象深い女性形象をつくり上げた。楊聯芬は次のように指摘している。

革命文學の中で、孫犁のように女性の美しさを描いた作者はほとんどいない。革命文學では革命と力に對する崇拜と政治第一の目的のため女性の外面の美しさに魅かれない。孫犁が女性に對する關心と描寫で大切にしているのは、男性と同じ「ますらをの美」ではなく、女性に特有の「柔順の美」である。<sup>39</sup>

孫犁が描いた女性のうちもっとも注目されるのは、「鐵木前傳」の小満兒である。「鐵木前傳」は、土地改革から農業集團化へ向けて動き出した農村における階級の分化を主題としている。貧しかった時代

に築かれた年長の世代の友情の破綻、若い世代の時代への姿勢の違いから生ずる分岐と新たな男女の結びつきを軸に、さまざまな状況にある村人の生活を描いた作品である。小満兒は結婚生活でつまずき、生き方を模索している女性である。時代の基準から見れば、その生活への姿勢はいわゆるおくれた人物に分類される。この女性をその優れた能力、美しさ、コケットリーと生き方の危うさをも含めて、きわめて魅力的に孫犁は描き出したのである。建國後十七年の文學には類例のない人物形象である。こういう人物もふくめてその時代に生きる人びとを階級的な視點から裁くのではなく、あるがままの人間として描くのが孫犁の特質であり、方法であった。女性の美しさ（外面の美しさも含めて）を孫犁のように描いた作者は解放區作家だけでなく、同時代の作家にもなかった。

(五)、魯迅への親近——類を見ない傾倒

孫犁は魯迅に觸れた長短の文章を三十八篇書いている。そのうち六篇はもっぱら魯迅を論じたものであり、ほかに比較的詳しく言及しているものに『文藝學習』がある。この三十八篇という數字は、現代の作家の中で最も多いものではないだろうか。魯迅への傾倒について孫犁自身は次のように書いている。

私ひとりわけ魯迅先生の散文が好きで、青年時代には熱狂的狀態に達した。食べるものや必要なものを節約して魯迅の本を一冊買うと、寶物と見なしていつも手放さなかった。その頃は中學で勉強していたが、毎日授業が終わると、待ちきれない気持ちで圖書閱覽室に行つて、新聞立てに向かつて魯迅先生が『申報・自由談』に發表した文章を読んだ。當時、反動當局の檢閲を逃れるために魯迅先生は毎日ペンネームを變えていたが、私は先生の文章

を見分けることができた。いつもほぼ暗唱できるまで読んでから、やつと新聞から離れた。<sup>(40)</sup>

文章から魯迅のものであると見分けられること、さらにその文章を暗唱できるまで讀むというのは並々ならぬ傾倒である。文革中にブツクカヴァーに記した「書衣文」にも魯迅への傾倒を示す記述はいくつも見られるが、二つだけ見てみる。一つは「私は古籍を購入する時、始めは魯迅日記の『書帳』をもとに、それをたよりに良書をもとめ、慎重を期した。」<sup>(41)</sup>であり、もう一つは「昨日また魯迅日記の書帳をざつと調べたところでは、私の線装の古籍は十のうち七か八になり、版本もほぼ同じくらいになる。」<sup>(42)</sup>である。建國後孫犁は魯迅をたよりに中國古典の世界へ入った。孫犁の魯迅に對する傾倒は私淑する師に對する弟子のそれである。他の解放區作家には見られないことであると思う。

結語

孫犁は革命作家として時代が作家に求めるものに應えて作家活動をつづけてきたが、趙樹理のように直接當面する政治的課題に應えて書くことはしなかった。彼は解放區作家の中で時代の主流意識をこえた思想、人間觀をもった作家であった。彼の思想の根底には五四の人道主義があり、魯迅を手本に人びとの生活を現實に即して描くことを自らに課した。彼は當時の主流思想から見えていられるおくれた人物（例えば「鐵木前傳」の美しく矛盾に満ちた小満兒）を時代の基準で裁斷することなく、その姿、考え、感情、生活があるがままに描いたのである。

趙建國の次の指摘は孫犁の解放區作家としての特異性を正確にとら

えたものと考える。

孫犁は解放區の作家の中で時代に左右されることの最も少なかった作家であることができる。だから少なからぬ當代の若い作家が孫犁の作品から養分を攝取し、或いは直接孫犁に教えを乞うことを願ひ、進んで孫犁の影響を受けている。たとえば河北の作家阿寧はこう語っている。「國內のこれらの作家の中で、私に最も大きな影響を與えたのはやはり孫犁である。彼はたいへん美しい作家であり、彼の作品は時代の制約を受けず、普遍性、概括性を具えているので、書いたものはいつまでも残る。たとえば『鐵木前傳』などは、何度讀んでも飽きるといふことがない。とくに彼の作品にしみ込んでいる人文精神は、私に大きな影響を與えた。」

「時代に左右されることの最も少なかった作家」とは「時代の價值觀に左右されることが最も少なかった作家」ということである。その作家の思想と作品が時代的な有効性をこえて普遍性をもっているという意味であらう。阿寧のいう「人文精神」とは人間を中心とする思想、人道主義である。孫犁は共產黨に屬する革命的な立場に立つ作家であった。抗日戰爭の時代には抗日に立ち上る郷里の人びとの生活とその中にある美を描いて、抗日という時代の課題にこたえた。國內解放戰爭の時期には郷里の農村に下放して土地改革のとり組みに参加し、それを主題とする作品を書いて時代の課題にこたえた。また「鐵木前傳」では農業集團化という一九五〇年代の課題にこたえようとした。しかし彼は思想的に時代の課題にこたえることを試みるとともに、獨特の美意識をもってその時代に生きる人びととその生活の中の美を描いた。孫犁はマルクス主義の理論をふまえて作品を書いたのであるが、その

#### 孫犁の位置

マルクス主義は「文藝講話」の規定という枠内にとどまる狭いものではなく、五四の新文學の人道主義に裏打ちされた廣がりをもつ思想であった。孫犁が解放區作家の中で「時代の價值觀に左右されることが最も少な」い作家になりえたのは、彼がそういう思想、文學觀をもって、彼にしか書けない、独自の風格をもつ作品を書いたからである。九〇年代以後の評價の上昇をもたらした要因も、そこにある。

注：

- (1) 「世紀文學六〇家」評選結果は、『孫犁精選集』北京燕山出版社、二〇〇五年十二月、所收の出版前言と「世紀文學六〇家」結果によった。
- (2) 王瑤『中國新文學史稿』下(『王瑤文集』第四卷、北嶽文學出版社、一九九五年十二月、三〇三頁)。在他這些作品中、關於農村女性活動的描繪往往佔很重要的地位、其中有勇敢矯健的革命行爲、但也有一些委婉細膩的男女愛情、有時這種細緻的感觸寫得太生動了、就和整個作品的那種戰鬥氣氛不太相稱、因而也就多少損害了作品所應有的成就。
- (3) 北京大學等編『中國現代文學史』江蘇人民出版社、一九七九年八月。
- (4) 顏雄等主編『簡明中國現代文學史』湖南大學出版社、一九八八年八月。
- (5) 金漢等主編『新編中國當代文學發展史』杭州大學出版社、一九九二年八月、一九八頁。由于無法擺脫的時代和歷史的原因、趙樹理的創作當然也存在着某種局限、他提倡「問題小說」、強調創作直接爲當前的政治服務、注目于古代文學和民間文藝的傳統而忽視對外來文藝的借鑒等、因而藝術視野不够開闊、比較封閉。
- (6) 劉宗武「關於孫犁」日本中國當代文學研究會例會、二〇〇五年七月十六日、於駒澤大學。
- (7) 孫犁「文字生涯」(孫犁『晚華集』山東畫報出版社、一九九九年九月)

九十一頁。現在回想起來，那時的寫作，真正是一種盡情縱意，得心應手，既沒有干涉，也沒有限制，更沒有私人雜念的，非常愉快的工作。

- (8) 孫犁「宴會」《藝齋小說》人民日報社，一九九〇年一月，一三四—一三五頁。

- (9) 楊聯芬「孫犁：革命文學的溫情者」《楊聯芬『中國現代小說導論』四川大學出版社，二〇〇四年四月，三〇九頁。

- (10) 孫犁「碑」《孫犁文集》一、百花文藝出版社，一九九二年六月，二一頁。誰家的小夥子要出外，她在鷄叫頭遍的時候就醒來，在心裏替人家打點着行李，計算着路程，比方着母親和妻子的離別的心，暗暗地流淚。

- (11) 同前，一二六頁。低下頭來，感到絕望的悲哀。

- (12) 「孫犁緻康濯的信」一九四六年七月三十一日付《孫犁『陋巷集』山東畫報出版社，一九九九年九月，三三〇頁。一群戰士迫於絕路，又不能救助，低下頭來，感到悲哀，並不是小資情緒。

- (13) 同前。「這個批評我覺得不夠實事求是。」「我不打算來個什麼反批評。」

- (14) 孫犁《善闈室紀年》「摘抄」《孫犁『陋巷集』前出，二二一頁。冬，土改會議，氣氛甚左。王林組長，本擬先談孔厥。我以沒有政治經驗，不知此次會議的嚴重性，又急於想知道自己家庭是甚麼成分，要求先討論自己，遂陷重圍。有些意見，不能接受，說了些感情用事的話。會議僵持不下，遂被「搬石頭」，靜坐於他室，即隔離也。

- (15) 郭志剛、章無忌『孫犁傳』北京十月文藝出版社，一九九〇年十二月，二二四—二二五頁。

- (16) 「孫犁致康濯的信」一九四六年七月四日付，前出，三三五頁。
- (17) 茅盾『反映社會主義躍進的時代，推動社會主義時代的躍進！』人民文學出版社，一九六〇年十月，三十七—三十八頁。

- (18) 林志浩、張柄炎「對孫犁創作的意見」《劉金鋪、房福賢編『孫犁研究專集』江蘇人民出版社，一九八二年九月，二八一頁。依據小資產階級的觀點、趣味、來觀察生活、表現生活。

- (19) 王文英「對孫犁的《村歌》的意見」《同前，四二四頁。小資產階級的思想感情，作者自己的思想感情。

- (20) 方紀「一個有風格的作家——讀孫犁同志的《白洋淀紀事》」《劉金鋪、房福賢編『孫犁研究專集』江蘇人民出版社，一九八二年九月。

- (21) 孫犁「關於鐵木前傳的通信」《秀露集》山東畫報出版社，一九九九年九月，二九四頁。進城以後，人和人的關係，因為地位、或因為別的，發生了在艱難環境中意想不到的變化。我很為這種變化所苦惱。

- (22) 孫犁「頤和園」《孫犁『藝齋小說』人民日報社，一九九〇年一月，一三〇頁。這些年，即使是在朋友至交面前，大家都不習慣談個人的私事。

- (23) 孫犁「王婉」《藝齋小說》前出，九十六頁。後來我知道，這一案件，近似封建社會的「欽定」大案，如果主持會的不是熟人，我因為在會上說了那些不合時宜的話，也會牽連進去。我受了很大的刺激，不久，就得了神經衰弱症。

- (24) 郭志剛、章無忌『孫犁傳』前出，では病狀について觸れているが，原因については孫犁の言葉を引いて「長期積勞」（長年の疲勞の蓄積）として，郭志剛『孫犁評傳』重慶出版社，一九九五年八月，では「長期積勞」としている。周申明、楊振喜『孫犁評傳』百花文藝出版社，一九九〇年一月では發病の原因には觸れず，病氣の回復がおくれた原因を反右派闘争以後の一連の政治的事件も影響したと述べている。管蠡『孫犁傳略』百花文藝出版社，二〇〇四年七月，は病氣の原因には觸れていない。

- (25) 孫犁「文字生涯」《孫犁『晚華集』前出，九十一頁。一九五六年大病之後，幾乎沒有寫。加上一九六六年以後的十年，我在寫作上的空白階段，竟達二十年之久。

- (26) 葉君「參與、守持與懷鄉——孫犁論」《社會科學文獻出版社，二〇〇六年十二月》は，一三一—一三三頁で，正如日本國學院大學の渡邊晴夫教授所認爲的那樣，「孫犁於一九六二年在創作上有一定的收穫，當然與其身體健康恢復程度有關，更重要的是社會發展對其影響的結果。由此看

來、緊接着的一九六三、一九六四、一九六五年三年，作品數量急劇減少，將其歸咎於政治形勢的緊縮也不應該是一種偏見吧」；「如果說出於政治的原因而導致孫犁患病無法寫作的話，那麼同樣也是由於政治形勢的變化又賦豫孫犁得以創作的條件」。這顯然是十分公允的中的之論。と小論を引用して述べ、二九六—二九七頁で、在搜集資料的過程中、發表在《岱宗學刊》二〇〇一年第三期上的《文革》前的孫犁——疾病的恢復與十年的創作空白》一文引起我的極大關注、作者是一位名叫渡邊晴夫的日本學者。文章所體現出的極爲細膩的考據作風讓我大開眼界、它給我的興奮是此前閱讀任何有關孫犁的研究成果時所沒有的。」と述べている。

(27) 孫犁『風雲初記』作家出版社、一九六三年三月、四一八頁。現在回想起來：在那嚴重的年月裏、殘酷的環境裏、不管她的性格帶着多少缺點、內心裏帶着多少傷痛——別人不容易理解的傷痛、她究竟是決絕的從雙重的封建家庭裏走了出來、并在幾次場合裏、對她的公爹和親生的父親、進行了針鋒相對的鬭爭。這也是一種難能可貴、我們不應該求全責備。她參加了神聖的抗日戰爭、并在戰爭中犧牲了她的生命。她究竟是屬於中華民族優秀兒女的隊伍、是抗日戰爭中千百萬烈士中間的一個。

(28) 葉君『參與、守持與懷鄉——孫犁論』前出、一三七頁。

(29) 孫犁『言戒』《藝齋小說》前出、十九頁。然後是百般凌辱。我認爲這是奇恥大辱。當天夜裏、觸電自殺、未遂。

(30) 孫犁『一九七六年』《藝齋小說》同前。

(31) 孫犁『三毛』《藝齋小說》前出、二五五頁。然終於得見國家撥亂反正、『四人幫』之受審於萬民。痛定思痛、乃悼亡者。終以彼等死於暗無天日、未得共享政治清明之福爲恨事、此所以於昏睡之年、仍有藝齋小說之作也。

(32) 孫犁が文革後に書いた『藝齋小說』三十五篇の大半には、文末に「藝齋主人曰」という言葉で始まる文言の論贊がつけられている。

(33) 孫犁「無題」《孫犁文集》續編一、百花文藝出版社、一九九二年六月、

#### 孫犁の位置

一五一頁。他逝世了。緊鎖的雙眉、鎖上的皺紋、並沒有因爲死、而得到舒展。他是一名老戰士、說他因爲愛國憂民、死不瞑目、當然也不爲無理。但近年來、最使他痛苦和不安的、是時時刻刻泛上心頭的懺悔之情。不是對革命、對工作的懺悔、這些方面、他完全可以說是問心無愧的。他是對自己壯年遠行、背井離鄉、拋捨老父老母、青春髮妻、幼小兒女、一生之中、對他們沒有盡到應盡的責任而懺悔、痛苦。

(34) 孫犁『我與官場』《孫犁自敘》金梅編、團結出版社、一九九八年一月三五四頁。『我自幼胸臆、怕見官長。參加革命工作後、見了官長、總是躲着。如果是在會場裏、就離得遠些、散會就趕緊躲開。』「我也不願見名人。凡首長請文藝界名人喫飯、叫我去、我都不去。」

(35) 孫犁『宴會』《藝齋小說》前出、一三三頁。又有一次、是市委文教書記、宴請一位畫家、派車併派了一位好販賣字畫的朋友來接我、因爲說笑話、引起我的不快、斷然拒絕了。

(36) 渡邊晴夫『劉心武會見記』《日本中國當代文學研究會報》第十二號、一九九八年八月。

(37) 孫犁『文學和生活的路——同『文藝報』記者談話』《秀露集》前出、一二二頁。『凡是偉大的作家、都是偉大的人道主義者、毫無例外的。他們是富於人情的、富於理想的。他們的作品、反映了他們對於現實生活的這種態度。把人道主義從文學中拉出去、那文學就沒有甚麼東西了。』

(38) 同前、一二二頁。善良的東西、美好的東西、能達到一種極致。在一定的時代、在一定的環境、可以達到頂點。我經歷了美好的極致、那就是抗日戰爭。我看到農民、他們的愛國熱情、參戰的英勇、深深地感動了我。我的文學創作、就是從這個時候開始的。我的作品、表現了這種善良的東西和美好的東西。

(39) 楊聯芬『中國現代小說導論』前出、三〇九—三二〇頁。革命文學中、很少有作家像孫犁那樣去表現女性美。革命文學中由於對革命與力量的崇尚以及政治第一的宗旨、并不看中女性的形式美。孫犁對女性的關注與描

繪、看重的恰恰不是別與男性一致的「陽剛之美」、而是女性特有的「陰柔之美」。

- (40) 孫犁「關於散文」(連雲飛等編『孫犁散文』中、中國廣播電視出版社、一九九五年三月、八十五頁。)我最喜愛魯迅先生的散文、在青年時代、達到了狂熱的程度、省喫儉用、買一本魯迅的書、視如珍寶、行止與俱。那時我正在讀中學、每天下午課畢、就迫不及待地奔赴圖書館閱覽室、伏在書架上、讀魯迅先生發表在《申報·自由談》上的文章。當時、爲了逃避反動當局的檢查、魯迅先生每天都在變化着筆名、但他的文章、我是能認得出來的、總要讀到能大致背誦時、才離開報紙。

- (41) 孫犁「書衣文錄」(『耕堂雜錄』河北人民出版社、一九八一年六月、二十七頁。)餘購置舊籍、最初按照魯迅日記書帳、按圖索驥、頗爲謹慎。

- (42) 同前、七十一頁。昨日又略檢魯迅日記書帳、餘之線裝舊書、見於帳者十之七八、版本亦近似。

- (43) 趙建國『趙樹理孫犁比較研究』崑崙出版社、二〇〇二年八月、二五九頁。可以說孫犁是解放區作家中歷史局限性最小的作家。因此、不少當代青年作家願意到孫犁的作品中汲取養分、或直接向孫犁本人討教、進而受到了孫犁的影響。比如、河北作家阿寧說、「在國內的這些作家中、對我影響最大的要算孫犁、他是一個很美的作家、他的作品不受時代的局限、具有廣泛性、概括性、寫的東西更爲久遠、如《鐵木前傳》等、都是百看不厭、特別是他的作品中滲透出的人文精神、對我的影響很大。」

資料(孫犁と趙樹理に當てられてゐる頁數は紙幅の關係で省略)

現代文學史は次の十三種——中國現代小說史、楊義著、人民文學出版社、一九九一年。中國現代文學史、葛留青、張占國著、人民出版社、一九九四年。20世紀中國現代文學史(上)、蘇光文、胡國強主編、西南大學出版社、一九九六年。20世紀中國文學史、孔範令主編、山東文藝出版社、一九九七年。中華文學通史、第七卷、近現代文學編、中國社會科學院文

學研究所、張炯等主編、華藝出版社、一九九七年。中國現代文學三十年、錢理群、溫儒敏、吳福輝、北京大學出版社、一九九八年。中國現代文學史、朱棟霖、丁帆、朱曉進主編、高等教育出版社、一九九九年。中國現代文學史、程光焯、劉勇等主編、中國人民大學出版社、二〇〇〇年。現代中國文學史、主編周曉明、王文平、湖北教育出版社、二〇〇四年。中國現當代文學、劉勇主編、中國人民大學出版社、二〇〇六年。中國現當代文學史(上) 雷達、趙勇、程金城主編、甘肅人民出版社、二〇〇六年。中國現代小說史、閻浩崗著、人民文學出版社、二〇〇六年。中國現代文學史簡編(增訂版)、唐改主編、嚴家炎、萬年近協編、復旦大學出版社、二〇〇八年。

當代文學史は次の十三種——中國當代小說史、金漢著、杭州大學出版社、一九九〇年。當代中國文學史、主編、劉文田、周相海、郭文靜、河北大學出版社、一九九一年。新編中國當代文學史、主編、金漢、馮雲青、李新宇、杭州大學出版社、一九九二年。20世紀中國文學發展史(下)、蘇光文、胡國強主編、西南師範大學出版社、一九九六年。中華文學通史、第九卷、當代文學編、中國社會科學院文學研究所、張炯等主編、華藝出版社、一九九七年。同、第十卷。中國當代文學史、陳其光主編、暨南大學出版社、一九九八年。中國當代文學概論、於可訓著、武漢大學出版社、一九九八年。共和國文學五〇年、楊匡漢、孟繁華、中國社會科學出版社、一九九九年。新中國文學史、張炯編著、海峽文藝出版社、一九九九年。中國當代文學五〇年、王萬森、吳義勤、房福賢主編、青島海洋大學出版社、二〇〇一年。中國當代文學史寫真、吳秀明主編、浙江大學出版社、二〇〇二年。中國當代文學發展史、金漢總主編、二〇〇二年。中國當代文學史新編、黃健、了帆、王彬彬主編、人民文學出版社、二〇〇六年。